

私が最初に企業大学訪問の案内をもらって見たとき、行ってみたいという気持ちとあまり気が進まないのとで迷っていました。「東京かぁ、行ったらすごく楽しそうだけど、1泊2日の日程なんて大変そうだし、それだったら部活に行って練習していたいなぁ...」というのが、当時の私の正直な気持ちでした。行くことを強く勧めたのは両親でした。「あなたが東大行くかどうかはさておいて、東京なんて滅多に行くことないんだし、せっかくだから行ってきたら？きっといい経験になるよ」と言われ、確かにそうだなと思って、行くことにしました。

職業分類の際に、第一希望に翻訳家、第二希望に編集者として学校に提出しました。必ずしもそうでなくても、将来は本に関わる仕事に就きたいと思っています。しかし、提出はしたものの、クラスや部活の友だちに将来就きたい職業をきくと、医者や薬剤師や建築士などの理系の職業を志望する人が多く、「私のような、文系の仕事を志望する人はそう多くないものなのかなあ」と思いつつ、ガイダンスを受けました。ところが、ガイダンスに来ていた人には、確かに前述のような職業を希望する人も多かったのですが、以外にも、教師を志す人、弁護士や検察官などの法律関係の仕事に就きたい人、そして、私と同じように、編集者や小説作家といった、本に関わる仕事に就きたいと考えている人も何人かいて驚きました。訪問したい企業はすんなり決まったのですが、アポ取りの際に2社ほどに断られ、これでどうだと覚悟した新潮社から許可を頂き、訪問することが決定しました。

当日は、まず午前中に笹川平和財団から貴重なお話をいただきました。お話を聞いた4名の方は、以前から海外や海洋に興味を持っていらっしゃったそうで、現在は日本の商品を海外へ輸出する手助けや、海をきれいにするための活動を行っているそうです。ほんの小さなことから興味を持って、そこから学習へと発展させ、社会に貢献していくためには何をすべきかを考えるのが大切だということを学ぶことができました。

そして午後からは、いよいよ企業訪問です。私たちの班は、新潮社を訪問し、取締役の伊藤さんに、本をより多く売るための御社の取り組みや、他の出版社と差をつけるための装丁などの工夫を伺いました。

現在の日本では、電子書籍などの急速な普及により、若い世代を中心に“活字離れ”が進んでいると言われていています。活字離れが進むと本の売り上げも落ちると考えられますが、新潮社では、本を買ってもらうためにある試みをしています。それは、「本の面白さを知らない人にとって、本が身近な存在になってもらうようにする」ことです。活字離れが進んでいるのは本を読まない人がいるから、本を読まない人がいるのは本の面白さを知っている人と知らない人がいるからだと考えています。そこで、本の面白さをより多くの人に知ってもらうために、新潮社では40年ほど前から、新潮文庫の編集部・宣伝部・営業部が選んだ本を紹介する「新潮文庫の100冊」というパンフレットを毎年つくり、「恋する本」「泣ける本」「考える本」などのいくつかジャンルに分け、それぞれのジャンル毎に、シリーズ

物や人気作家新作、時代を超えて愛される名作などを紹介しています。60年ほど前までは、本の紹介やアピールをしなくとも、読者が自然に本を手にとっていましたが、今の時代は本を手取る人や機会が減っており、「いかにこの本が面白いのか」を読者にアピールする時代になってきている、と伊藤さんはおっしゃっていました。

また、広告をつくって世に発信するときは、読者目線で作ることが大事だそうです。新聞の下の広告や、電車内にぶら下げる広告には、作品名、受賞した賞の名前だけでなく、一般の人々の感想や、芸能人や評論家などの著名人の感想を併載することで、より本の面白さを伝え、興味をもってもらうことが出来るといいます。

また、伊藤さんは編集者としても活動しており、編集者として仕事をする中で大変なことややりがいを感じる時を質問しました。

やりがいを感じるのは、自分が担当している作家の作品を、その作品の第一読者として読めることだそうです。作家さんは、今の時代の流れを背景に作品を書かれることもあるそうで、自分がその作品を読み、訂正や編集を加えることで、まるで自分が時代の流れをつかんだかのような感覚になれるそうです。また、本のキャッチコピーを考えるのも編集者の仕事で、編集者という仕事の醍醐味の1つだとも話してくださいました。また、担当の作家の考えと自分や会社としての考え方が食い違い、板挟みのような状態になってしまうと、両者の和解などでとても辛いとおっしゃっていました。これを乗り切るためには、もちろん両者間の関係を取り持つ自分がしっかりしていないと話にならないのですが、それ以外にも、自分だけの力ではどうにもならないときは、会社の上司や同僚など、周囲の人々の助力や、「きっとなんとかなるさ!」といった、ポジティブな思考も必要不可欠だそうです。

また、新潮社の文庫本にはスピンと呼ばれるひも状のしおりがついています。角川文庫や集英社文庫など他の文庫本では見られない工夫の1つです。スピンをつけるにはまた別にお金がかかりますが、アンカットといって、本として束ねた紙をまとめて裁断せずに少しずつ裁断することで、本につけたスピンを残すようにしているのだそうです。さらに、本を売り出す読者層によっても、本の装丁に工夫が見られます。例えば、中高年向けの本の場合、他の世代向けの本と比べて字を少し大きくしたり、読んでいるときに目がチカチカしくくするために、紙の色を少し黄色っぽい色にしているそうです。

本の売り上げをあげるためには、読者の声のチェックが欠かせません。公式サイトで読者の感想が見られるようにしたり、最近は SNS の使用率が高いので、細かくチェックして、必要に応じて本の増刷をしているそうです。

最後に、最近チャレンジしている新しい取り組みについて質問すると、今まで新潮社にはなかった斬新な取り組みを試みていることがわかりました。

新潮社は基本的に小説を売り出すのがメインで、ライトノベルやマンガなどはあまり考えられなかったそうですが、最近は「新潮文庫ネクス」というライトノベル専門の文庫を作ったり、マンガ雑誌や小中学生の女子向けのファッション誌を出したりして、若い世代の本

の売り上げの増加を図っています。

企業訪問のあとは、ホテルに戻り、二高のOB・OGとの懇談会がありました。ここでは、高校生活のアドバイスや、勉強の方法などを教えていただきました。お話を伺った先輩のアドバイスをまとめると、まずはたった15分といった短い時間でいいから毎日欠かさず勉強して、勉強するという癖をつけるのが第一だと言われました。ものすごく当たり前のことですが、本当はすごく難しいことなんだな、と最近実感しています。また、数学は、学校で配られたチャートを何回も何回も解き直し、自分が解けない問題は印をつけて、そこは確実に解けるよう解法を理解すると良いとも言われました。私は数学がとても苦手なので、活用したい考えだと思いました。

また、勉強のことだけでなく、普段の生活についても教えていただきました。受験までは3年間あり、短いという人もいますが、実は以外に長いものだから、それまでは自分の好きなことをどんどんやって、受験勉強をがんばるべきだそうです。

今回の企業大学訪問では、私が思っていた以上に本当にたくさんのことを学ぶことができました。私は訪問の前は翻訳家を目指していましたが、新潮社の訪問を経て、編集者という仕事にも少し興味を持つようになったと思います。ですが、その夢を叶えるためには、やっぱり何よりも勉強するのがとても大事だな、と改めて実感しました。懇談会で先輩がおっしゃっていたように、受験まではまだまだ時間があるので、その間は部活など自分がやりたいことを思い切りやりつつ、毎日少しでも勉強をやり続けて、あとは努力の先に夢の実現があるのを信じよう、と強く思いました。

今回のような貴重な経験を体験する場を提供していただいた先生方、本当にありがとうございました。